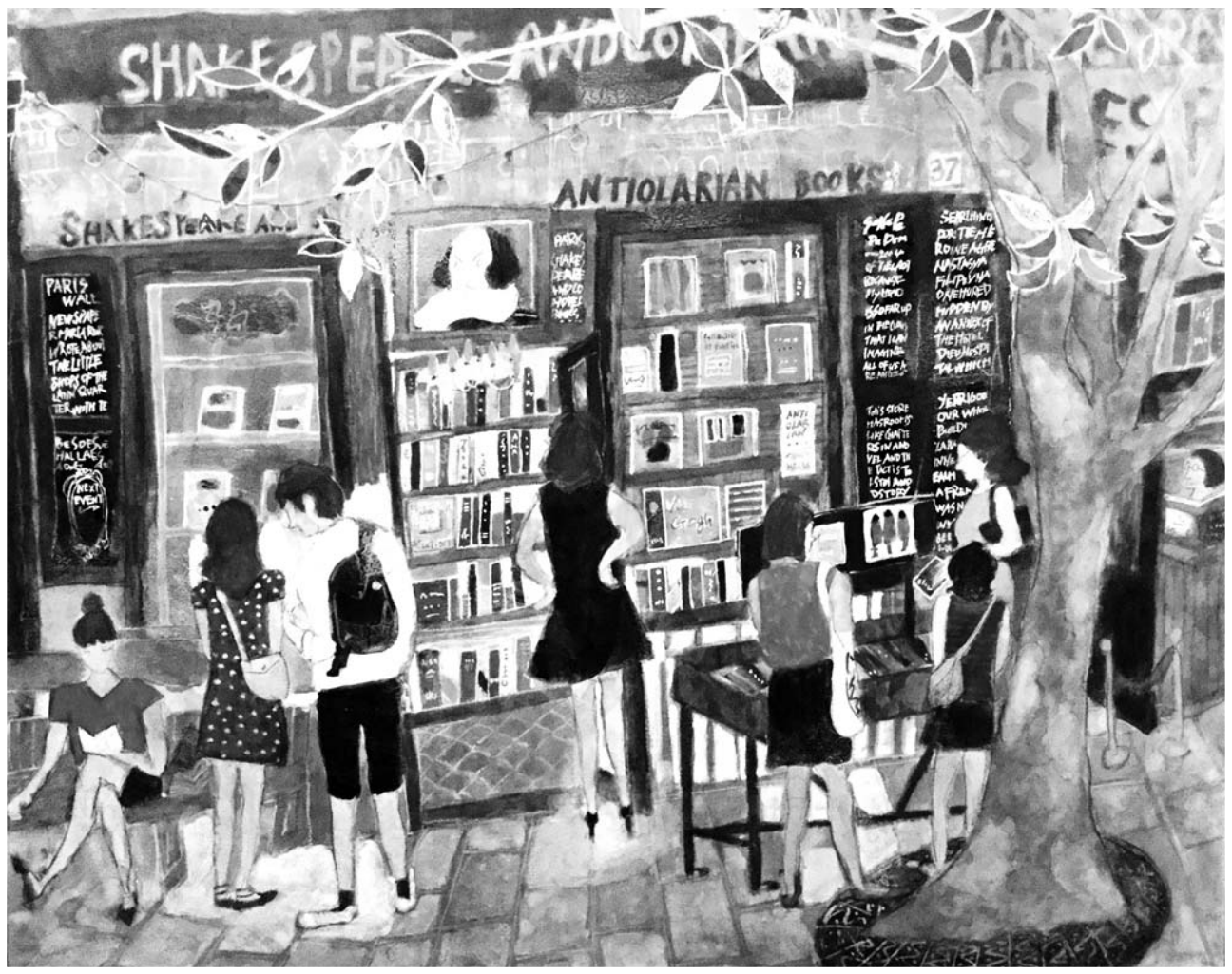
# やまさき文化

’１８－３＊No.３７




宍粟市山崎文化協会

# 今、若い人たちは

宍粟市山崎文化協会会長　福岡久藏

昭和十六年四月、私が小学校一年生になるときに「国民学校」に変わりました。私たちは「元気で体操、一、二、三、国民学校一年生」と明るく歌っていましたが、本当は有無の言えない暗く重い時代だったと思います。

同年十二月八日、日本は真珠湾を攻撃し、戦争を始めたのです。

そして、昭和二十年八月十五日、私が五年生の時に「…堪え難きを堪え、忍び難きを忍び…」と玉音放送がラジオであり、私たちは戦争が終わったことを知りました。

その頃の私たちの頭は、男は丸刈り、女はみんなおかっぱでした。服装といってもだれも兄や姉のお下がりを着ていました。破れたり、穴が開いているところは全て継ぎがあたっていました。学校へ行く履物は藁草履です。破れれば裸足です。冬の寒い日など足の指は赤く腫れ上がり、割れて血が滲んだりしていました。本当に物のない、貧しく辛い時代でした。

姫路の街はお城だけがぽつんと残り、その他は何もない焼け野が原でした。

戦争での日本人の犠牲者は三百万人とも四百万人とも言われています。

戦時中、ひどい目にあった韓国人の恨みの形が慰安婦の少女像です。その他、中国やベトナムやフィリピンには、今も戦災孤児がおられるのです。戦争をして良いことなど一つもありません。戦争で問題が解決したりは絶対しません。

戦後七十年余りが過ぎ、生活は落ち着き、少し豊かさを感じられるようになりました。かつて貧しい生活をした人たちは豊かさを知ると、なお一層の豊かさの追求に走りました。しかし、そのことは人々が自分だけよければ良いという身勝手な言動や、自己中心的な考え方を広めたようです。

今、若い人たちは非常に明るく生きています。手押し車を押す老人を見ると道をあけたり、電車で乳児を抱く母親に席を譲ったり、人としての優しさを身につけ、さわやかに颯爽と生きている中学生や高校生、大学生や若い人たちの姿は、私に「新しい時代の到来」を思わせてくれます。

## ◇目　次◇


古銭有情　浅田　耕三　1
特別寄稿　中野　景介　4
新子さんにもらった山崎の縁　森本萬千子　6
短　歌　中尾　富子　8
俳　句　田中　健三　10
郷土研究との出会い　前野　洋一　10
郷土芸能の保存活動　上林　博實　11
『新潮六十五年』と「やまさき文化」　弓削ルリコ　11
「笹の子茶道教室」に思う　三谷　恭三　12
山崎八幡神社薪能　木藤　友江　12
五行歌　前田　侑那　13
合唱って楽しい！　石田　陽子　13
子どもたちの歌声　大園　達子　14
踊りは生きていく原動力　寺村　舟裕　14
美術協会と私　石野　和雄　15
邦楽の灯を絶やさぬよう　藤間豊巳千　15
日本舞踊とけいこ　井上賀麗勝　16
吟道を後世に繋いで　三宅　哲朗　16
忘　憂　祐谷　隆亮　17
篠笛教室に感謝！　志水　和司　17
絵を描く　今　思うこと　大牧　宏一　18
三十周年を迎えて　山下　直昭　19
この頃思うこと　片山　吉恵　19
五十周年記念コンサートを前にして　中瀬　公三　20
山崎加生いさわ冠句会　清水　省三　20
川柳破丸会　21
ともしびの賞受賞　浅田耕三さん　21
第三十九回　春の芸能祭のご案内　22
事務局だより　22
編集後記　清水　省三　22
表紙画「パリの書店」／カット　中居　里子
表紙題字　荒木　俊介

# 古銭有情

浅田　耕三

ー上田君ー

地域の文化活動に少々協力したという新聞記事の中に、私の名を見つけて貴兄は早速便りを下さいました。

有りがとうございました。

昭和二十五年に学校を卒業して、私は郷里の宍粟へ帰って中学校に勤め、貴兄も出身地の加西郡へ帰って教師になられたと記憶していますが、今度いただいたあなたの住所は神戸市垂水区になっていました。

現職の折は時々開いていた同窓会で互いの消息に通じていたのに、退職後はほんとに疎遠になってしまいました。

退職後に神戸へ居を移されたものかと推察しています。

ー閑話休題。

あなたの便りを頂く数日前の平成二十九年十一月の末、私は私の町の防災センターで開かれた老人会の例会に出席しました。この会は毎回、どなたかの講演を聞くのですが、この日の講師は、高砂市在住の上谷昭夫という先生でした。

演題が「大空に散った若者たち」、副題が「郷土兵庫の戦争秘話『神風特攻隊護国白鷺隊』」で、内容は現加西市の鶉野飛行場にまつわる戦時下の話でした。

この飛行場跡地には今も一、二〇〇メートルの滑走路や機銃の銃座、いくつかの防空壕などが残っていて、上谷さんは見学者にその説明役をひきうけ、またこの飛行場に近い北条鉄道の北華口駅のボランティア駅長を勤められているということでした。

お話によると鶉野飛行場は昭和十八年二月にでき上がり海軍航空隊の訓練場となりました。そして昭和二十年二月には海軍特攻隊白鷺隊が結成され、日本各地から飛び立った機と共に鹿児島県鹿屋の海軍特攻基地に集結し沖縄戦に参加して、この飛行場出身では六二人の隊員が南の空に若いいのちを散らしてしまったそうです。

その隊員達の名簿や隊の編成表や遺書など豊富な資料を私達聴衆に配って上谷さんは話されました。大半は士官や士官候補生の学徒兵でしたが予科練出身の人もかなりおられ、その一番歳下の予科練は昭和五年生まれ、一五歳の少年だったと。当時私も一五歳でした。だからいっそう身につまされたのかも知れませんがその話に私はひどく心を打たれました。

しかしそのメインの話の背景として日本が相手の米、英、オランダにどのように追い詰められ悲惨きわまる最後を迎えたか、広島、長崎の原爆犠牲者をはじめ、ついには三〇〇万人の日本人が国の内外で死に追いやられた経緯を縷々説かれる講師上谷さんの切々たる話ぶりは、聴きての心を十分に打ったようで、あちこちの席から吐息のような声が洩れきこえ、帰りのエレベーターに乗り合わせた人達の口吻の中にもその余韻がにじんでいました。

ところで上田君、その上谷さんの話に、私はもう一つ別の感興も覚えたのです。というのは当地宍粟市山崎町と上谷さんとはこれとはまた別のご縁があって、お話によると、昭和三十五年就職された氏は二一歳で山崎町の簡易水道の敷設工事に携り、河東の野々上に下宿して毎日仕事に出ておられたが岸田の旧神河中学校の講堂前の道路で工事をしていた時、一人の人夫が地表わずか五〇センチに埋まっていた壷を掘り当て、蓋をとったところ、夥しい古銭がつまっていました。

これは発見したものに所有権があるのでしょうという人夫をたしなめ、これは歴史的意義のある遺物にちがいないと直感した上谷さんは、写真におさめたり警察や町役場など公的機関に連絡したり、あるいは有識者に調査を依頼するなど保存につとめられたそうです。

私は市立図書館二階の歴史郷土館に当地で出土した銅鐸などと並んでこの古銭が展示してあるのを何度も見たり、何かに書いたりして以前から馴染みがありました。

そこでこの機会に少しこの遺物を貴兄に紹介してわが町の自慢をしたいと思いますのでこれもご縁の一つと思っておきき下さい。

貨幣の真中の穴に縄を通したいわゆる銭縄のこの古銭は緑青が吹き密着してしまったのも多く、したがって枚数ははっきりわかりませんが、当地発行の『山崎町史』によると、重さは約九貫（三七、五kg）余ありました。

日本における銭貨の発行は、日本史に造詣深い君はとっくにご存知と思いますが、日本書紀の天武朝十二年（六八二）頃の呪物、宝物として発行した富本銭のあとは、和銅元年（七〇八）発行の和同開珎以下、いわゆる本朝十二銭がありますが、平安末期迄の日本社会は物々交換の経済で『源氏物語』など古代の物語にも貴族が使用人につかわす禄などは殆どが衣類で、ほかは食料や什器などです。

岸田出土古銭と甕（山崎歴史郷土館保管）

貨幣が流通しはじめるのは平安末期、特に宋とさかんに交易した平清盛からのようで室町期に入ると貨幣経済はさらに発達するが、ただし日本で通用するその貨幣はすべて中国発行の銭で、つまり日本は外国製の外国の銭をつかってものの売り買いをしていたのですね。

この岸田出土の古銭もすべて中国製の銭で、発行した時代は唐、北宋、金、南宋、明に亘り、最古のものは開元通宝（六二一）で、以下乾元重宝（七五八）、唐国通宝（一〇世紀中期）とつづき、最も新しいのは明代の宣徳通宝（一四三四）にいたる三七種の銭でした。

つまりこれの持主は、発行年が約八百年に及ぶ古銭をたくわえていて、ある時それを土中にかくしたのです。

ではいつ、誰が、どんな事情でこんなことをしたのか。あれこれと推察し、歴史を俯瞰するたのしみにしばしひたりましょう。

『山崎町史』の綿密な考証によると、この古銭の発行年から推量してその時期は、永亨八年（一四三六）七月から慶長十三年（一六〇八）迄の約一七〇年間の期間にこの地に住む一人の地主級の男か、荘園の管理をする人物が大金を奪われるかもしれぬという不安を覚えた程の政情不安、社会不安が生じたのはいつだったか、『山崎町史』はそれを嘉吉元年（一四四一）六月、赤松満祐が将軍足利義教を自邸に招いて不意討ちにし、領国播磨に逃げかえった時か、そして同年九月にその満祐も山名持豊に攻められて現龍野市の城山城で自害し赤松氏が滅亡した嘉吉の乱の時か、それから応仁元年（一四六七）五月に起こった応仁の乱。そしてこの乱の終息で赤松氏が復活し、山名氏が播磨から撤退した文明九年（一四七七）時の騒乱。それともう一つ、天正八年（一五八〇）の秀吉の長水城（宇野氏）攻めの時と、この四つの時期が考えられるが、諸般の歴史的考察からすると最も可能性が高いのは、長水勢と秀吉勢の戦闘が激烈だったと想像される痕跡が岸田周辺の地名や口碑、半焼した仏像等にのこる長水落城の時としています。

河東や城下地区の水田は山崎町内では最も上質で、特に河東には七、八世紀の律令制度のもと、京の公家や有力社寺の荘園があったようでそこから上がる田租をまとめて納める地元の有力者がいました。

約一〇貫の古銭は、古文書に照らすと約一〇石相当の米の価値だったそうです。

それ程の大金を所有していたか、取扱っていたとすれば、この人物は、当地のかなりの実力者だったに違いありません。銭は土中に隠したが掘り返しはしなかったのです。いや、しなかったのではなく、できなかったのでしょう。かくて昭和三十五年十月迄、銭は日の目を見なかったのです。

まさか埋めたのを忘れたわけではなかったでしょう。あるいは埋めた場所がわからなくなってしまったか、戦禍のために周囲の様子が一変して見当がつかなくなってしまったー、たとえば茶の木の古株があってそれを目印に三尺東と場所を決めて埋めたのに、その茶の木が戦火に燃えてしまったとか。

なにしろ町史によると阿弥陀堂や寺もこの合戦で焼失したというのですから。場所がわからなくなったとすれば、どんなに自分の間抜けさ、迂闊さ、不運を嘆いたことでしょう。

ともあれ、大切な財産をなくしてしまって以後は窮迫し食うや食わずの境遇におちいったか、そうとすれば一抹の哀憐の情を禁じ得ません。

しかしもっと不運な想像は、戦火に巻き込まれてたった一つの命までうしなってしまったのではないか。隠した銭が気になって戦場をうろついていて敵とまちがわれ斬られたか、それとも流れ弾にあたって非業の死を遂げ、ために銭の在り処を家族にも告げられなかったか、そんな風にも思えてきます。

とまれかくまれ、水道工事の人たちのおかげで土中の古銭は四二四年ぶりに姿を見せ、図書館の二階に鎮座して私達に何かを語りかけているのです。

さて上田君、

君の生家に程近い鶉野飛行場にかかわる話を貴翰拝受の数日前に聴いたことに私は何となく因縁を覚えてこんな筆を執りました。

君はたしか少年航空兵として滋賀の大津だったかで訓練をうけているうちに終戦になり学校に復帰されたと記憶しています。教室の机の並んだうしろの狭い、かたい床板の上でほとんど助走らしい助走もせずに、いきなりくるりと空中回転したのに私たちは驚かされたのをいまだにおぼえています。

あれから茫々七〇年の歳月が流れてしまったのですね。おかげさまであなたも私も長生きさせてもらっています。

クラスにはいろんな兵種の軍隊からかえってきた人がいました。二級上には特攻の生き残りの人もいて、卒業後の教員採用試験も受験できず、行政関係の仕事に就かれました。

今思えばやはり大変な時代だったのですね。

ほんとに長々と駄文を弄しましたが、どうぞお元気でおすごし下さい。

参考資料「山崎町史」

特別寄稿

# 新子さんにもらった山崎の縁

前神戸文学館館長　中野景介
（宍粟市山崎町出身）

三月十日は川柳作家時実新子さん（一九二九～二〇〇七）の命日で「月の子忌」と呼ばれている。

毎年、彼女をしのぶ句会や催しが姫路や神戸、岡山などゆかりの地で開かれる。とりわけ没後十年の節目になった二〇一七年は各地の文学館で記念展も開かれ、にぎわった。その鮮烈な作品世界から川柳界の与謝野晶子といわれた新子人気が、いまだ衰えていないことを物語り、そのことがまた話題になった。

岡山・西大寺の生まれ。終戦後まもなく、十七歳のときに姫路・野里の文具店に嫁いだ。一男一女の子育てに追われながら姫路市内の川柳結社で学んだ。一九五五年、神戸新聞への投句が初めて掲載されたのを弾みに、才能が花開いた。

やがて神戸新聞川柳欄の選者を経て一九八七年に出した句集「有夫恋」はベストセラーとなり、新子の名を不動のものにした。同じ年に歌集「サラダ記念日」で一世を風靡した俵万智さんの短歌が、青春期の微妙な心情をさらりとした作風で詠んだのに対し、新子川柳は胸の内を重いナタでえぐるようなものだった。

〈菜の花の風はつめたし有夫恋〉

〈妻をころしてゆらりゆらりと訪ね来よ〉

夫ある女が恋をして何が悪い。信念は揺るがぬ。燃えたぎる情念をぶつけるのだ。

その「有夫恋」以前から、時実新子は私にとって気になる存在になっていた。彼女が神戸新聞川柳の選者をしていたころ、私は社会部の記者だった。文芸関係は学芸部の担当でもあり、面識があったわけではない。ところがあることで接点が生じた。

一九八五年は昭和六十年。その数年前から「昭和還暦」が口の端にのぼるようになっていた。長く続いた戦争の時代と戦後の混乱期。そして高度成長期を駆け抜けて迎えた繁栄の時代。人々は昭和の六十年を感慨を込めて振り返った。

神戸新聞は私を含む四人でチームをつくり、庶民昭和史、家族昭和史をテーマに取材を進めた。「私たちの昭和史」と題したシリーズを八五年一月一日から一年間、二百八十回にわたって連載した。

この企画と併せて、「昭和自分史」のエッセー・コンクールを催した。兵庫県内を中心に全国から千三百編近くが寄せられた。作家足立巻一さんらに選考を依頼し、最優秀に選ばれたのが新子さんの作品だった。

夫は兵隊にとられて行った南方で、マラリアにかかっていた。その後遺症かしばしばひどい発作を起こし、普段とは別人のようになって暴れた。戦争の傷跡に翻弄される家族の日々を書き綴った。書かずにはいられなかったのだろう。彼女の作品は一頭地を抜き、のちに随筆家としても名を成すその片鱗をのぞかせていた。

それから三十年近くたった二〇一二年三月。新子さんの長女で、自身も川柳作家の安藤まどかさんと初めて会った。私は神戸文学館の館長に就いていた。一年後が新子さんの七回忌。記念展を企画するかどうか。するならそろそろ準備にかからねばならず、まどかさんの協力も得なければならない。

まどかさんは嫁いでから東京生活が長い。少女時代を過ごした姫路を懐かしがった。私が山崎出身だと知ると、目を見開いて「近所やないの。うれしい」と笑った。それでもう開催は決まったようなものだった。

まどかさんには展示する資料類の提供とともに、記念講演会の講師もお願いした。彼女は「体力が持つかしら」と、そのことをしきりに気にした。がんの症状が進行しているのだと明かした。それでも本番では満員の聴衆を前に、母新子との姫路での暮らしや柳人新子への思いのたけを、一時間半にわたり休むことなく語り続けた。それから十カ月後、六十六歳で逝った。

会期中にもう一人、川柳作家芳賀博子さんにも講演してもらった。新子さんに師事し、彼女が主宰する川柳誌「川柳大学」の編集スタッフを務めた。今は、作句の傍ら関西各地で川柳講座を開く。新子さんの故郷の山陽新聞川柳欄「山

陽柳壇」の選者としても知られ、ファンは多い。芳賀さんは、新子さんの才気と強烈な個性を物語るあれこれのエピソードを披露して会場を沸かせた。

その芳賀さんのルーツが山崎にあることを、二〇一七年八月一日の神戸新聞夕刊一面「随想」で初めて知った。数人の筆者の持ち回りによる欄で、その日を担当した彼女は「まだ言えないが」と題し「―子ども時代の夏の記憶は兵庫県宍粟郡、現・宍粟市山崎町とともにある」と書き出していた。

―揖保川が流れる山間の町は母の里で、学校が長期休暇になるたびに泊まりがけで遊びに行った。祖父母を筆頭に三世代が暮らす家はいつ訪ねても「よう来た、よう来た」。ことにも夏はお楽しみのてんこ盛りだ。

同じ年頃のいとこたちと連日山へ川へと繰り出しては、冒険探検に体を張る。ふだんは大の虫嫌いでビビりのくせに、滞在中はザッツ山崎マジックにかかり、カブトやクワガタを手掴みできた。川の水の冷たさも川底のぬるぬるもへっちゃら。泳ぎ疲れた後のおやつは井戸で冷やした西瓜の食べ放題だ。

夜は蚊帳の吊られた広間で寝た。奥には大きな仏壇があり、布団を敷いてくれた伯母が「おやすみ」と灯りを消すと、部屋はふわりと異界になった。

この体験は「ゲスト」を「ホスト」の側に置き換えるだけで、そっくりそのまま私に当てはまった。

夏休みは近所の遊び仲間に、都会からやってきたいとこたちを加えて、遊びに遊んだ。矢口高雄さんの名作『ボクの学校は山と川』を地でいく日々だった。河原の焼けた石の上で、ヤスを小脇に、水中めがねを唾を吐きかけ吐きかけ磨きつつ、魚影をにらみつけていると、気構えはいっぱしの漁師だった。

山を歩き回ってミミズを集め、ウナギ捕りのつけカゴに入れて川底に仕掛けた。そのポイントは秘中の秘で、いとこにもこれだけは教えなかった。夜明け、冷たい水に入ってカゴを引き揚げる。ゴトゴトと音を立てて暴れるウナギで持ち重りのする感触と興奮は、今も忘れようがない。獲物は、家の前の流れにつけた生け簀代わりの木箱にためた。頃合いを見て祖父が半日がかりで開き、焼き、それをいとこたちとむさぼり食べた。

芳賀さんは私より十歳以上も年下。私の少年時代が一九五〇年代なのに対し、「まだ言えないが」の頃は六〇年代の後半だろう。それでもまだ、山や川が子どもたちの遊び場だったことが分かる。そうでなくなったのは七〇年代に入ってからだ。

その遊び場はどの辺りだったのか、と尋ねてみた。

「それはね」

揖保川の右岸。私の遊び場は、やや下流の大きな淵を挟んでほど近い左岸。体験が似通うはずである。

世間は狭い、と言ってしまえばそれまでだが、この不思議なご縁は、新子さんがまどかさんへ芳賀さんへとつないでくれたからこそ浮かび上がったのだと思っている。

ご縁はまだまだあった。芳賀さんが一緒に遊んだいとこ宅の向かいが、同じ遊び仲間のまたいとこ宅で、その父親というのが、私の神河中学（現・山崎東中）二年のときの担任の先生。夏休みにいとこを送り込んできていた私の叔母と、芳賀さんの母親は神河中の同級生で、二人は今も定期開催している同窓会の世話役仲間―。

「まるでミステリー列車に乗っているみたい」と大いに盛り上がったのだが、それはともかく、芳賀さんは〈まだ言えないが蛍の宿はつきとめた〉との八木千代さんの句を引きつつ、「随想」をこう結んだ。

―原体験で得た感動貯金はたぶん一生もので、誰にも盗まれることがない。そして子どもの私は子どものまま、今もあの夏で蛍を追い続けているような気もする。

そして私は、こんな句を拝借して拙文を締めくくりたい。

〈自転車でゆける一番遠い夏　芳賀　博子〉

**経　歴**

1951年　山崎町岸田生まれ
1969年　山崎高校卒業
1974年　日本大学法学部卒業
　　神戸新聞社記者
2000年　神戸新聞社社会部長
2006年　神戸新聞社姫路支社長
2009年　サンテレビジョン常務取締役
2012年　神戸文学館館長
2015年（～現在）甲南女子大学文学部非常勤講師

**著作物**

『篠山練兵場』『私たちの昭和史』
『私たちの旅』
（いずれも共著、神戸新聞総合出版センター）
など。

# 短歌

## 「語」お題に歌会始の儀

山崎歌人協会　森本　萬千子

新年恒例の「歌会始の儀」が十二日皇居・宮殿「松の間」で開かれた。今年のお題は「語」。天皇、皇后両陛下、皇族方、天皇陛下に招かれた召人、選者のほか、一般応募二万四五三首から選ばれた入選者十人の歌が古式にのっとった独特の節回わしで朗詠された。

宮内庁によると陛下は皇后さまと朝の散策を日課にされており、皇居御苑の二の丸庭園でキンランを見つけられた時の情景を詠まれた。キンランは春に咲くラン科の珍しい植物で、陛下が戦後間もない時期に中学時代を過ごされた東京都小金井市で初めて見られた思い出の花だという。

### 歌会始の歌

天皇陛下

語りつつあしたの苑を歩みゆけば
林の中にきんらんの咲く

皇后さま

語るなく重きを負ひし君が肩に早
春の日差し静かにそそぐ

皇太子さま

復興の住宅に移りし人々の語るを
聞きつつ幸を祈れり

皇太子妃雅子さま

あたらしき住まひに入りて閖上の
人ら語れる希望のうれし

秋篠宮さま

村人が語る話の端に生業の知恵
豊かなるを知る

秋篠宮妃紀子さま

人びとの暮らしに寄りそふ保健師
らの語る言葉にわれ学びけり

秋篠宮家長女眞子さま

パラグアイにて出会ひし日系のひ
とびとの語りし思ひ心に残る

常陸宮妃華子さま

遠き日を語り給へる君の面いつし
か和みほほゑみいます

三笠宮家寛仁親王妃信子さま

我が君と夢で語りてなつかしきそ
のおもひでにほほぬれし我

三笠宮家彬子さま

祖母宮の紡がれたまふ宮中の昔語
りは珠厘のごとく

高円宮妃久子さま

学び舎に友と集ひてそれぞれに歩
みし四十年語るは楽し

高円宮家長女承子さま

友からの出張土産にひめゆりの塔
の語り部をふと思ひ出づ

高円宮家三女絢子さま

気の置けぬ竹馬の友と語り合ふ理
想の未来叶ふときあれ

**召人**

黒井　千次

語るべきことの数々溢れきて生き
し昭和を書き泥みゐる

**選者**

篠　弘

街空に茜は冴ゆれ語らむと席立
ちあがるわが身の揺らぐ

三枝　昂之

語ることは繋ぎゆくこと満蒙とい
ふ蜃気楼阿智村に聞く

永田　和宏

飲まうかと言へばすなはち始まり
て語りて笑ひてあの頃のわれら

今野　寿美

歌びとは心の昔に触れたくてたそ
がれ色の古語いとほしむ

内藤　明

語り了へ過ぎにし時間かへり来ぬ
春の雪降る巻末の歌

**入選者**

米国カリフォルニア州　鈴木　敦子

母国語の異なる子らよ母われに時
にのみ込む言葉もあるを

長野県　塩沢　信子

片言の日本語はなす娘らは坂多き
町の工場を支ふ

広島県　山本　敏子

広島のあの日を語る語り部はその
日を知らぬ子らの瞳の中

福井県　川田　邦子

突風に語尾攫はれてそれつきりあ
なたは何を言ひたかったの

長崎県　増田　あや子

いつからか男は泣くなと言はれた
り男よく泣く伊勢物語

東京都　川島　由紀子

耳元に一語一語を置きながら父と
の会話またはづみゆく

神奈川県　三玉　一郎

語らひに時々まじる雨の音ランプ
の宿のランプが消えて

神奈川県　浜口　直樹

多言語の問診票を試作して聴くこ
との意味自らに問ふ

新潟県　南雲　翔

通学の越後線でも二ヶ国語車内放
送流れる鉄橋

長崎県　中島　由優樹

文法の尊敬丁寧謙譲語僕にはみん
な同じに見える

# 短歌祭入賞入選作品

## ◇第十三回宍粟市民短歌祭

。兵庫県知事賞

刈り草を干す父ありき門ありき刈りっ放しの土手の草踏む

栗山　節子

。兵庫県議会議長賞

子相撲でひ孫も初の土俵入りいづれは波賀の礎となる

和井　一栄

。神戸新聞社賞

手ごろなる石ころを持て水口の管理もやうやく板に付きくる

岡田　康子

。宍粟市市長賞

仲直りする方法が見つからず二つの卵鍋に煮ており

南光美代子

。宍粟市議会議長賞

やま山椒の匂いつきたる手を洗うシャガの花咲く細き流れに

安原　定子

。教育委員会教育長賞

亡き母の詠みたる短歌にふれながら内に秘めたる愁ひいま知る

下村　捷子

。文化協会長賞

張り替えし書院の障子は縁側のアロエの刺をもくっきり写す

志野木倫代

雪に折れ傷みはげしき白梅の咲かす一輪万語のごとし

岡本　光代

遠雷のとよみはふかく鋭くて吾が怠慢の心ゆさぶる

南　裕之

孫たちの次来る日までとあずかりし五匹の金魚一匹となる

高尾　米子

すり傷をかくし白色ぬりてある亡夫の愛車を手放しかねつ

谷本　幸子

血管浮き日焼けをしたる卒寿の手動くはうれし今日も草引く

佐々木タエ子

将棋指す棋士の指先しなやかに駒をはさみて盤面に打つ

川端　紀子

馬の尻御祓の如く尾をふれば追われし虫の楽しげな事

早川　嘉男

ここまでがわが森、林と連れ歩き重ねて教えぬ農を忌む子に

門積　健三

百万本の菖蒲の園に風生れて峡わたりゆく風は紫

新井　慶子

小さき指手にコロッケの種のせやればころころと球こしらへぬ

芦谷　孝子

## ◇西播磨短歌祭（平成二十九年度）

### （一般の部）

。兵庫県生きがい創造協会理事長賞

直売の白菜ひと玉二百円見知りの老いの一徹を買う

門積　健三

。兵庫県芸術文化協会賞

給油所のなくなり暗き県道を自販機のあかり廻りを照らす

大谷　忠子

。入　選

いっちゃんむちむち手足の可愛くて家族のアイドルまだ八ケ月

大倉　絹代

唐突に「おばあちゃん昔かれしゐた？」あれは片恋返事に困る

栗山　節子

## 新春詠

。はるかなる

柊に花咲きからたちも実りたり

はるかなる齢にわれは入りたり

ヘリポートにヘリ降りしのち音もなく海鵜ひとむれゆく都市の空

馬場あき子

。戊年の初日

戊年の初日の出なり多摩川の霜の河原に犬と見ている

ふり向けばながーいながーい影二つサッカーゴールの下まで伸びて

佐々木幸綱

。にんげんの出口

長城も長江も見て島国に戻り、みそひと文字を愛せり

銀河系その奥になほ奥の奥ありて人間の出口なしといふ

高野　公彦

。二年参り

鶴見俊輔二年参りを教へくれき火を囲み人ら年を迎ふる

媚びることなさず生き来し七十年おのづから敵も多くつくりて

永田　和宏

# 俳句

## 蛍狩り吟行

青嶺句会　中尾富子

梅雨入り間近の六月十日、春安川のほとりへ恒例の蛍狩り吟行に出かけた。

春安川は山崎町を流れる揖保川の支流で、昔から町中で蛍を身近に観賞できる川である。

数千種類と言われるホタルの中でも、光るのはわずか十種類ほどとか、日本で多く見られるのはゲンジボタルとヘイケボタル。飛びながら光るものはオスが多く、葉の上で光っているのはメスが多いと言われている。春安川のホタルは大きいのでゲンジボタルらしい。

日が暮れるのを待ちわびているとぽっぽっと蛍火が見え始めた。今年初めての蛍に歓声が上がる。まさしく乱舞というのにふさわしい蛍火を見て、豊かな自然が残るこの地と、懸命に短い命を燃やして飛び交う蛍に感謝して吟行を終えた。

・初螢細き十指に包み込む　光子
・蛍火のむれに見とれて又はぐれ　緑山
・里に生き至福の刻や蛍とぶ　良子
・待つという刻こそよけれ夕蛍　ゆき
・園庭の光へ飛び入り恋蛍　チエノ
・儚さを秘めて乱舞の恋蛍　美保子
・幼な児の両手にそっと初蛍　幸子
・岸辺立ちささやくように蛍歌　とみこ
当日欠席の方の詠草
・夏帽子見えなくなる迄振る別れ　とみ代
・梔子の角曲りても尚香る　駆雲
・雨蛙鳴き一村の暮れ初むる　榮子

### 青嶺句会詠草

・始発バス乗務の点呼息白し　秋久　光子
・新調の靴のかるさよ草萌ゆる　門積　緑山
・桜咲き至福の時を分かち合ふ　杉山美保子
・山董声かけ合うて登山道　鳥羽チエノ
・鳥たちて尖る鳴き声霜の朝　田中　良子
・手水鉢水なみなみと実南天　永井とみ代
・奥山の棚田に蕎麦の白き波　中尾　富子
・野辺の道笹鳴き尋ね逍遥す　三浦　ゆき
・初硯真白き和紙に思い込め　若松　幸子
・心解き放ちて望(もち)の月仰ぐ　原田　駆雲
・山の端のうすら日に向き返り花　山口　榮子

### 五色俳句会詠草

有馬温泉吟行（平成二十九年二月）
・俳縁で集う有馬路春浅し
・青柳の揺らぎし影もさみどりに　秋久　光子
・雪解川ねねの迎へし天下の湯
・ほっこりと地面ぬくみで噴く泉源　重田　陽子
・少女等と共に春呼ぶねねの像
・薫りくる白梅古木洞を抱く　三浦　雪
・葦出づる影に疎らや春の鴨
・開きたる旅の栞に春立ちぬ　冨井　幸子
・有馬川跳ねる鶺鴒春隣り
・春光や巡る清盛五輪塔　福元　敦子

### 山脈句会詠草

・あはあはしうつつも夢も年暮るる
・熱燗やよけれ悪しかれ来し方は　浅田　蕪耕
・夏蝶や羅漢行脚にいそしめり
・絵はがきの滲みて届く七変化　重田　陽子
・借景の裏窓閉じて冬仕度
・泣き笑ふ新地旧知や校の春　田中　慶英
・精霊舟余波(なごり)残して向きを返へ
・健康の文字の多かり年賀状　谷口　昭子
・青空を燻る湯煙新走(あらばしり)
・秋祭り町屋をつなぐ紙垂の縄　鳥羽チエノ
・月雫落ちて湖面の華となり
・寒暁の黙の中なり至福なり　西田　宣子

・峡深く忍び入りたり霧襖
・蓼の花過疎地の風に逆らわず　三浦　ゆき
・てのひらに愛をもらいし報恩講
・湯婆やこころ根ほっこり水ながる　高井　麗子
・空仰ぎ亡母を偲びて庭花火
・静かさや夜空を光らす星の川　岡田　福代
・佛飯の乾きの早し二月尽
・羅漢さん若葉の天蓋いただかれ　松本　壽子
・稲刈りの天まで続く奥の能登
・老いたる手足を伸ばして初湯かな　清水　省三

## やまさき文化大学俳句部詠草

・深切りの残りし枝に梅の花
・冬炬燵とぎれとぎれの会話かな　金山　英子
・父をこえ歩む七十路冬木の芽
・左義長の熾火（おきび）にひそか喪中人　坂井　惠子
・坂下るごとき速さの年惜しむ
・芹摘んでいづこへ母は隠れけり　坂井　久栄
・のどかさや土手に夫婦のにぎり飯
・底冷えの朝や湯気たつ製麺所　杉本　富子
・草原に小さき花あり春の風
・朝刊の届けし音や冬の朝　清水　省三
・遠目にも銀杏黄葉の檀那寺
・初霜が来たと一行農日記　髙井　智代
・秒針の切れよき音や暮遅し
・薄墨の花の咲きたる大地かな　竹内　幸子
・両手（もろて）あげはじける笑顔花吹雪
・腰かがめ滑るまいぞと初氷　田中　保子
・初茜子らの顔染め影長し
・春雷の地を這ふ響き身のすくむ　寺元多美子
・寄鍋を囲む三代夕餉かな
・冬空へ宇宙飛行の日本人　萩原　恵子
・かなたに碑こなたに塚や里桜
・言ひかねて眼がものを言ふ冬帽子　速水美知代
・さりげなく庭のかたすみ福寿草
・和太鼓の心にドンと春一番　平形　照美
・山茶花や優しき色に染まる人
・夫の手に春の温もる声をきく　前野　徳子
・薄氷のとける速さや本能寺
・流さるるままのひと日や日脚伸ぶ　宗平　圭司

## 笹ゆり・みやこ句会詠草

・冬霧に包まれ母が居るやうな
・朝夕に足を運びて豊の秋　小田　朝子
・地はすべて神のものなり下萌える
・裸木の向こうの空の広さかな　是兼　妙子
・世界地図拡げ気を揉む開戦日
・屋根の雪丑三つ時の四股を踏む　坂井　惠子
・黄昏の孤愁の庭に石蕗の花
・酒蔵の醸す匂ひや新酒酌む　坂井　久栄
・さよならは春雨の降る午夜でした
・寒垢離（ごり）や気魄で唱ふ般若経　重田　陽子
・鶴翼の嶺嶺に居座る冬将軍　田中　慶英
・鴬や見上げる空に飛行雲
・朝まだきドクターヘリは寒空へ　田村富美子
・名刹の辿る歴史や冬紅葉
・奥の院正座する背に春の風　速水美知代
・山峡の父祖の眠りし里余寒
・日だまりに早くも土筆頭だす　矢野登次郎
・神杉の影のやわらぐ日永かな
・梅万朶過疎の進みし里に住む　宗平　圭司

（別グループ）

・対岸に狐火灯る露天風呂
・水涸れて賽の河原と僧は言ふ　里見　和樽

# 郷土研究との出会い

山崎郷土研究会
田中　健三

「田中さん、悪いけど支部長会に代わりに出てくれんか。」

戸原地区支部長さんからの依頼の言葉でしたが、これが私と山崎郷土研究会との直接の出会いでした。元々は、父と母が本会にお世話になっていて子どもの頃に父の近くには会報があったのを覚えています。その二人が他界した際に「継続して会員を」ということで、私は名ばかりの会員でスタートしました。しばらくすると支部長さんが足や膝が悪くなり自由がきかないということで、代役を引き受けたのです。年二回の支部長会に出席し、出来上がった「山崎郷土会報」の配布と年会費の集金の仕事でした。

そんな私が、今年度より本会の事務局をさせていただいています。正直両親が亡くなった際に退会していたらと、後ろ向きな気持ちが先に立ちました。しかし、昨秋に支部長さんが亡くなられたのを契機に、言葉ではうまく言い表せませんが、亡くなった両親達に本会とのご縁をいただいたと思うようになりました。会に出席していると、教科書で学習した歴史と地元の歴史とがつながるような話も聞けます。遠く離れた歴史がとても身近に感じられます。四月の頃と少し違った自分がいることに気づきます。

本会は、現在会員二七三名で、文化財の保存・維持および調査研究をなすこと、そして地方文化の振興を図ることを目的として活動しています。会報部、研修部、史跡部の三つの部がありますが、会報部では今年度も夏と冬の二回、「山崎郷土会報」を発行します。冬号で一三〇号となります。研修部は、九月に岡山県の備中の国散策ということで「備中高松城と吹屋、ベンガラの町並み散策」を実施しました。史跡部は史跡、城跡等の標識・標柱の維持点検や史跡・古文化財の実地調査、見学会の企画実施等に取り組んでいます。

前任の事務局長のように的確な仕事はできませんが、不思議な縁を大切にして少しでもお役に立てるよう努めて参りたいと思っています。

# 郷土芸能の保存活動

山崎郷土芸能保存会
前野　洋一

郷土芸能保存会は、五つの団体が活動しています。

私が所属する「西町獅子舞保存会」は、山崎八幡神社の秋祭りでの獅子舞奉納、三百年余りの歴史のある能舞台で全演目のお披露目、獅子屋台（担いだんじり）と町内を練り歩き演目の披露、また老人施設や障害者施設への訪問を行なっています。

当獅子舞は、戦後途絶えていましたが、酒蔵から屋台が見つかったのを機に昭和六十年に三十六年ぶりに獅子舞が復活しました。

西町の獅子舞は、出雲地方の獅子舞で北方系、川戸・宇原の獅子舞は南方系で、両方の接点になっているのが山崎町の獅子舞だといわれています。

西町は、山崎八幡神社の門前に位置し、戸数三十戸余りの小さな自治会です。小さな自治会であるからこそ出来る、自治会員＝保存会員となり一体となって取り組んでいます。

当初は若者も子供達も多く活気のある活動が出来ました。

練習は、八月の盆過ぎから約二ヶ月、週一回のペースですが祭り近くになると毎日となり練習にも熱が入ってきます。子供達も練習を楽しみに見学にやってきていました。そこで、子供たちにも小さなときから獅子舞に親しんでもらうため子供獅子舞も取り入れました。幼稚園児から中学生まで出来る内容にアレンジしています。

今では、指導者の高齢化もあり、子供獅子舞が中心になってきています。

少子高齢化、若者の地域離れの影響で保存会の存続の危機がありましたが、近隣自治会からの応援や知り合いの応援などにより存続出来ています。

現在は活動が出来ていますが、保存会を立ち上げた私達が、近い将来活動出来なくなったとき二度目の危機が訪れるのではと非常に危惧しています。「そんな心配しないでもそのときは若者が立ち上がる」と頼もしい声も聞かれます。

この少子高齢化は、五つの全ての団体が抱える非常に難しい問題ですが、各種団体で知恵を出し合い末永く活動を続けていただきたいと思っています。

# 『新潮六十五年』と「やまさき文化」

新潮会
上林博實

昨秋、『新潮六十五年』記念誌を無事発刊致しました。収載されている三十五篇の随想や追悼は、各々に会員の温かい御人柄や風格に溢れ、人生の機微に触れるものでした。伝統ある新潮会の会長という重責を終え安堵していた矢先、今回の原稿依頼を受けました。私は、日頃文化活動とは縁遠いため、初刊からの貴重な冊子を数冊お借りし、拝読しました。

初刊では十九団体の手記が掲載されていたのが、昨年の三十六号では二十五団体に増えていました。また新潮会の十二名の先輩方が、様々な団体の代表として役員や編集等に携わっておられたことも分かりました。改めてこれまでのご尽力に敬意を表すと共に、「やまさき文化」の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

新潮会は、昭和二十七年に明治末期から大正生まれの二十数名で発足しましたが、当初からの会員で在籍されていた方も昨年鬼籍に入られ、現在は新会員も加わり二十八名で活動しています。

新潮会の目的や活動を、私流の四文字造語で表現します。

一、会の目的　「お世話になっている地域に報恩の心」から《報》
二、会の組織　「各組、単位の共助で皆仲よくの心」から《皆》
三、会の例会　「各組が担当企画し講話を広く深く学ぶ心」から《学》
四、会の年間行事　「新年会や忘年会と旅行に楽しく参加する心」から《楽》

これら《報皆学楽（ホウカイガクラク）》の四つの心を追求し、再び七十周年に向かって少しずつ皆様と共に準備をしようと思います。そして、戦争をしない平和な社会を守る心も持ちながら…。

# 「笹の子茶道教室」に思う

宍粟茶華道協会
弓削ルリコ

平成二十七年、茶華道協会会長・故大西耕雲先生はじめ諸先生方の熱心なご努力により、宍粟市内の子ども達に日本の伝統文化である茶道教室が発足しました。

月一回の教室であります。「文明が栄えて心が滅びる」じわじわと押しよせる不安な社会を感じる昨今、畳の上を静かに歩き、お互いを思いやる心の「お先に失礼します」を体験し、床の間に活けられた野の花を拝見し、そして、一番大切な床の間に掛けられたお軸の意味を先生に分かり易く解説して頂き、お軸の意味を何となく理解する。

子ども達にとって日常とは全く異なった未知の世界でありましょう。

私事ですが、数十年前日本とフランスの文化交流年の年に、フランスのニースでお茶会が開かれました。あるご縁で私も着物持参で参加致しました。不安の中、先生方と一緒に準備し、当日を迎えました。新聞での宣伝が功を奏し、お客様は列をなし、汗だくで茶筅を振った記憶があります。落ち着いてから後で聞いたのですが、新聞記事に、日本にはすばらしい伝統文化があり羨ましい。又茶道にかかわる精神文化の深さが称賛された記事が載っていました。

現在、笹の子教室は三十八名の子ども達が参加しています。月一度の教室ですが、先生方が子ども達に一生懸命教えられている姿にも心を打たれます。

世界に羽ばたく未来ある子ども達に「日本」をしっかりと意識して、心豊かな感性を養って頂きたいと願うのは私だけの思いでしょうか。

# 山崎八幡神社薪能

山崎謡曲同好会
三谷恭三

山崎八幡神社薪能は、古くは山崎藩主本多公の奉納薪能に起源すると言われており、現在の薪能奉賛会によって開催されるようになったのは昭和五十五年のことでした。当時は元禄時代の舞台が現存していましたが橋掛かりはなく、仮設のものを造り当時の壺阪壽会長（故人）他多くの地元の皆さんの協力を得て、第一回を開催しました。以来ほぼ隔年で開催を続け、平成十九年には老朽化の激しかった舞台を地元の篤志家の援助により現在の形に大改修がなされ、今年二十回の節目を迎えることになっています。

今回の演目は「三笑」と「紅葉狩」を予定しています。「三笑」は中国東晋の時代（五世紀）、南部の廬山に庵を結んで隠棲していた慧遠禅師（シテ）の所へ、ある日陶淵明と陸修静が訪れ、滝の風雅をたたえ菊の花を愛でて酒を酌み交わし、興に乗じて舞を舞い、至福の時を過ごすという話です。

一方「紅葉狩」は平安の世、平維茂（たいらのこれもち）が鹿狩りの途中、高貴な女性が侍女を連れて幕を廻らし、紅葉の宴を催しているところに通りがかり、誘われるままに宴に加わります。女性の美しさと酒に酔いしれて、ついに眠り込んでしまいます。女性は戸隠の鬼の化身で、夢から覚めた維茂に襲いかかってきますが、維茂はこれに勇敢に立ち向かい、戦いの末に鬼女を退治するという話です。

開催の時期が九月ということもあり、いずれも秋にちなんだ演目で、特に「紅葉狩」は神社隣接の紅葉山が十一月には多くの観光客が訪れる名所であることはみなさん周知の通りです。他方「三笑」と言えば、ご存知の方も多いと思いますが、神社のすぐ麓の西町で昭和五十三年まで日本酒を醸造しておられた「本家門前屋」さんの銘柄で、創業は一八〇年程前ということですから、大塩平八郎の乱の起きた頃つまり天保年間に始まったお酒の銘柄というわけです。

しかもちょうど今年は山崎中心市街地活性化委員会の企画で、同町内の二軒の造り酒屋さんが、それぞれこの「三笑」の銘柄の日本酒を地元の宍粟米を原料として製造し販売されるとのことで、こちらもきっと皆さんに楽しんでもらえることと思います。どうかたくさんの方に神社を訪れていただき、秋のひと夜を伝統芸能と美酒の香りに酔っていただきたいと思います。

# 五行歌

山崎文学会
木藤友江

深い河を
幾つも超えた平常心
そのこころは
誰に告げるともなく
五行の歌

あの大きな桜が咲きました
五分から八分に、そして満開に
ゆるやかにざわめくように
風に揺れる桜の枝
何故か私の心も揺れ騒ぐ

あれどこ
あれ？
このあいだの、あそこに置いたあれ
？…
なにかヒントを下さい

齢、とったね
えっ、齢って取るものなの
すると私は来年また還暦
あの頃の私に追いつくのは
あと何年

うふふ
くっくっく
何がそんなに楽しいの
何がって、そりゃ
わからないけど楽しいの

# 合唱って楽しい！

宍粟市少年少女合唱団
六年　前田侑那

私は、三年生の十一月に友達に誘われて入団しました。

初めは、どうしたらいいかわからなかったし、知らない子ばかりだったので、とても緊張しました。でも練習に行っているうちに、他の学校の子でも、普通に話ができるようになって、休けい時間にみんなと一緒に外の遊具で遊んだりしてとても楽しいです。他にはみんなと一緒に歌の練習をしている時がもっともっと楽しいです。

私は、今までミュージカルを三回しました。今年で四回目です。一回目は「青い鳥」で赤ちゃん役をしました。二回目は「ピーターパン」でマイケル役をしました。三回目は「スーパーモンキーゴクウ」でバショーオー役をしました。初めてのミュージカルに出た時は、すごく緊張をしてセリフもなかなか覚えられませんでした。でも、二回目、三回目とは楽しく演じることができるようになりました。

今年は、「やまたのおろち」でアマテラスオオミカミ役をします。練習を始めたばかりの時は、セリフや動きが覚えられなかったりして、全くうまくできませんでした。最近では長いセリフや動きなども、覚えることができるようになりました。

ミュージカル本番まで、あと少ししかないので、成功できるようにしっかりがんばりたいです。ミュージカルだけではなく、歌を歌う時も、大きな声で歌って思いっきり楽しみたいです。

# 子どもたちの歌声

山崎民謡連合会
日本民謡　山っ子会
石田陽子

大きな舞台で伸び伸びと唄っている子どもの姿、堂々と立つ姿、それを舞台の袖でハラハラしながら見ている大人達。どちらの姿も羨ましくもほほえましくも思いながら、心から拍手を送っています。

今から出番となると、喉はカラカラ、足はガタガタの大人達も唄い終わるとなぜか元に戻ります。出番前も、真っ直ぐで素直な子どもたちのようになりたいものです。

山っ子民謡教室には、かわいい子ども達が結構います。二歳から中学生まで毎回教室はとても賑やかです。大人達も孫を見ているように目を細め、頬もゆるみっぱなしです。平均年齢も少し若くなり、気持ちもホッコリとなります。三味線の音色も華やいで、弾く手にも力が入ります。

二歳の子は、おばあちゃんの唄声を家で聞きながら覚えたのでしょうか、途切れ途切れの状態ですが、おの囃子も自分で入れてリズム良く歌います。可愛くて嬉しいですね。

私たちも、ボケてなんかいられない。子ども達からパワーをもらって頑張らないと、と自分に言い聞かせます。

年を重ねるにつれて脳の細胞がどんどん消えているんだから、さあ、今年もたくさんの予定が待っています。

忙しい日々の中ですが、前を向いて子ども達と一緒に練習に励み、頑張っていこうと気持ちを引き締めています。

# 踊りは生きていく原動力

さつき民踊グループ
大園　達子

私は、いくつかの団体にご縁があり、その時その場で精いっぱい動ける今に、心より感謝しながら活動をさせてもらっています。

その一つに「さつき民踊グループ」があり、一生懸命お稽古をしています。先生から丁寧にご指導をいただき、仲間の皆さんと楽しくお稽古に励んでおります。

お誘いを受けてのご縁でした。私は元々体を動かすことが好きで、特に踊りは大好きでした。皆さんと週一回お稽古を積んでいきながら、多くの題目に挑戦してきました。

年月を重ねるとともにグループの平均年齢は後期高齢者へと上がっていき、一つのことを覚えるのにも、時間がかかるようになってきました。

特に私は皆さんに迷惑をかけることが多くなってきました。そして、体の不調などで病院やお薬のお世話になりながらも、お陰様でいつも気持ちを前向きにしてくれるお稽古だけは続けています。リハビリになるのよねと仲間同士励まし合っています。

五年前に夢公園で「お祭りマンボ」を楽しく踊ったのですが、今その踊りを踊ってみると、体力に問題があることを痛感します。しかし私たちは、元気で踊れることに感謝しています。

また、いろんな施設に呼んでもらい、踊ったり、おしゃべりをさせていただくのも楽しみの一つになりました。

グループの皆さんと、温かい気持ちを共有しながら、心満開に一日一日を大切に送らせていただきたく思います。

# 美術協会と私

山崎美術協会
寺村　舟裕（裕子）

山崎美術協会発足時より入会している私には、こんな思い出の品々がある。

第一は、高校在学中、町展などの手伝いをしていた時、学校帰宅途中に友沢医院の看護婦さんに呼び止められ、入ると先生が抹茶茶碗を手渡された。小振りの黒楽である。「窯から出す時少し跡がついているが」と、優しくおっしゃって、今もずっと愛用している逸品である。

次に、昭和四十五年初めて姫路市展に出品し、入選した時「おめでとう」と葉書が届いた。父が、山陽運送の社長さんだと教えてくれた。その人は美協の会長であった。大変達筆である。

また、県展で二回目の特別賞をいただいた平成十四年、中学校の体育館で展覧会の陳列を手伝っていると、田内先生が「よかったね」と、手作りの夫婦湯呑をくださった。自分の弟子でもないのに有難いことだと、今も大切にしている。

いろいろと悩んでいる時、神戸まで勉強に来ないかと声をかけられた。平成十七年である。三宮行きのバスも運行しておりラッキーだった。月に一度であるが、十五人のメンバーの作品を拝見し、刺激を受けることも多く、有意義な時を過ごしている。今も神戸行きを続けている。

母の病気、父の死などを乗り越え、十一年が経った平成二十八年秋、高校からの夢であった日展第五科、書に初入選した。びっくりであった。帖作品で23㎝×28㎝の料紙・十四枚に和歌を三十五首小字仮名で書いた。まだまだ納得できるものが書けない。

今まで導いてくださったすべての人達、両親家族に感謝するのみであり、また、山崎という書の盛んな環境であったことも良かったと思っている。

宍粟市には書を学ぶ人が多く、中央展などに出品されているが宍粟市展は最近減少している。

地元にもたくさん参加してくださることを希望いたします。

# 邦楽の灯を絶やさぬよう

山崎邦楽の会
石野　和雄

戦争に明け暮れた時代がやっと終わり、日本の国がこれからどうなるだろうかと思いながら故郷山崎町に帰ってから半世紀以上となりました。

私事ですが、尺八の世界の中で今日まで続けてくることができました。

私たちの会は、全部で六社中あります。「司友会」「山崎竹壮会」「絵夢の会」「琴泉菖蒲会」「光陽会」「藤の会」とあります。

諸先輩方は皆亡くなられて、代替わりしております。昔からの演奏会場の変遷を見てみると、山崎公会堂、山崎小学校講堂、旭座、下村記念館、山崎文化会館と場所を移りつつやってまいりました。

邦楽の演奏者も昔は多かったのですが、時代とともに減少して、また、高齢化が進み、新人の育成もままならず困っているのが現状です。

その中にあっても、増員されている社中もあります。琴泉菖蒲会さんは、平成二十二年は二十六人の会員が、平成二十九年には四十四人となり、そのうち若い方で尺八をやってみたいと思われている方が四人あると聞きましたので驚きました。

尺八など初めから音が出ないので、すぐ止めてしまいますが、私たちの努力不足でしょうか。皆様の奮闘を期待いたします。日本古来の伝統を絶やさないよう後継者育成が急務と思っています。

# 日本舞踊とけいこ

山崎日本舞踊の会（郁踊会）
藤間　豊巳千

一口に、日本舞踊と申しましても、その中には長唄あり、清元あり、また常磐津、端唄、小唄、義太夫に地唄舞等々いろんな種類があります。

それらの踊りは、一人ではどうにもならないもので、踊る者、唄う者、弾く者また囃す者がいて、その人達の呼吸が一つに合ってこそ、はじめてうまく出来上がると思います。これは、色々な条件により、なかなか得がたく、しっくり意気の合った舞台が終わった時は、気持ちが明るく晴れ晴れと心豊かな楽しい気分になれるものです。これは舞台を務めた者にだけ与えられる喜びだと思います。

そのような舞台を務めるために、日舞の稽古をしている者は、日舞の基本的な姿勢として、腰の入れ方、首の使い方、目の使い方、手の扱い方、足の運び方、肩の扱い方等言い出すと限りがありませんが、要は形の美しさを求めるものだと思っています。

日舞は、能と歌舞伎から取り入れられていると聞いていますが、それを想うと能の姿勢は立派で、少しでも真似ていきたいと思います。また、それらの踊りを分解してみますと、舞と踊りと科（しな）の三つから成り立ち、音を聞き、拍子に合わせることが大事です。それをはずすと間が悪いと云うことになり、足拍子もふまえ、これらのことを念頭に、伝統芸能である日本舞踊がこの地に続くことを祈る思いで、稽古を積んでいきたいと思っています。

# 吟道を後世に繋いで

山崎詩舞道連盟
賀堂流　最上吟詠会
井上　賀麗勝

私は詩吟にご縁をいただいて四十年、音痴な私を吟の世界に誘ってくれたのは、今は亡き主人でした。私は詩吟で一番好きなのは、合吟です。五人と二十人と五十人の合吟は、二十年前から姫路すこやかセンターで各吟詠会から集まって、音の高さが違う人、年齢も経験年数もバラバラで、そんな方々との練習です。始めは息を合わすことがたいへんで、どうなるのかと思っていました。一年も経つと皆の心が段々一つになり、吟を一人でしているようによく揃ってきだし、二年目くらいに全国大会で東京の武道館に立たせてもらいました。旅行気分で行きましたが、流石に全国大会です。入賞もできず、意気消沈して帰りました。

それからも何回か武道館に行き、今から十四年前には全国優勝し、その喜びはともに苦しみ、競った仲間とのチームワークだったと感激し、涙したことは今も忘れることのない思い出です。

その仲間も年を取り、三分の一ほどになりましたが、その後、ＮＨＫのお正月番組に出吟させて頂いたことなど忘れられないたくさんの感動を与えてもらいました。

私だけに止まらず、吟の素晴らしさを後世に伝えていきたいと思い、孫達に呼びかけ、幼稚園から習い始めて、一年生の時に床の間の掛け軸の漢詩を読んで、親戚の者を驚かせました。

そんな嬉しいエピソードもありましたが、今では我が家の道場も五歳児から八十歳までと幅広い年齢層で漢詩や和歌を大声で練習し、腹筋を鍛えて、ストレスの発散にもなり、心と体の健康法を仲間と続けられることに感謝しています。

幼稚園から習い始めた孫も、この春から中学生、昇段試験や競吟前にはお風呂の中でも一緒に練習しました。舞台で連吟した時、緊張で震えていた孫達が朗々と姫路文化センターで独吟する姿を見て、この子達が吟道を継承して行けるよう、大切に育んでいきたいと思いました。

吟道で大和魂を身につけ、世の中に出て苦境に立った時、それを乗り越え、世の役に立つ大人になってくれたらと願うばかりです。

# 忘憂

山崎囲碁同好会
三宅　哲朗

囲碁大好き人間の私は、いつも鹿沢にある囲碁道場「忘憂」でお世話になっております。この忘憂とは文字通り〝うれいを忘れること〟でありますので、その日は余計な悩みや心配ごとを忘れ、無心になって碁を楽しんでおります。

ところでこの忘憂という言葉、なんと千年以上もの長い歴史があることをご存じでしょうか。

私は時々、最上山公園の千畳敷へ出かけますが、あるときそこにひっそりと座っている句碑にふと目が止まりました。そこには「銀漢や　我が憂きことの　小さけれ　泊水」とありました。（＊銀漢…天の川、銀河のこと）「広大な夜空に輝く天の川に比べれば我が憂きことなど小さい小さい」と泊水さんは達観されたのでしょうか。そうです。私はこの句には間違いなく忘憂への思いが込められているのだと感じたのです。それで忘憂についてもう少し詳しく調べてみたいと思ったのです。

早速図書館へ行き、日本国語大辞典をひもとくと、忘憂とは、本来の意味とは別に「酒の異称」とあり、その参考例として次の漢詩が引用されていました。

「数局囲碁招二坐陰一三分浅酌飲二忘憂一」

これは平安前期（九〇〇年頃）時の右大臣菅原道真が著して醍醐天皇に献上した有名な『菅家文草』にある漢詩の一節だそうです。現代訳にするため一部の字句に注釈を添えましたので、ご自分でじっくりとその意味合いを感じ取っていただければ幸いです。（＊坐陰…碁を打つこと　＊三分…少々　＊浅酌…しずかに程よく酒を飲むこと　＊忘憂…酒のこと）

どうですか、詩文の感じを掴んでいただけましたか？

それにしても千年以上も昔に、人を招いて碁を打ったり、程よく酒を飲んだりと、趣味の世界やその浅酌する様子がリアルに表現されており、ほとんど現代と変わらないではないでしょうか。私は驚きながらもなぜか嬉しい気分なのであります。

# 篠笛教室に感謝！

宍粟和太鼓アーツ倶楽部
篠笛教室
祐谷　隆亮

入室して三年目、なかなかうまくなりません。地区の保存会で獅子笛を吹いていました。篠笛教室に入ったのは、獅子舞もそろそろ引退の時期かなと思った時、笛を手放すのが寂しかったのがきっかけです。

一年目、途中入室でしたが、息・指使い・下腹の力の入れ方等基本から教わりました。入室してまもなく、新見先生のライブを鑑賞しました。一歩でも半歩でも近づきたい、きれいな音を奏でたい…篠笛のすばらしさを堪能したい、と今もそれが一番の夢です。

その年の和太鼓フェスティバル、初めての出演です。満席の文化会館、初級教室の演奏曲は「赤とんぼ」、忘れもしません、緊張のアマリかドファファの最初のドの音が出ません、焦って後はヒーハーのみ。終わって「ごめん、あかなんだ」の言葉だけ。でも今思えば貴重な体験だったと思います。

その時、つくづくと思いました。上級教室の皆さんのように堂々と演奏しきれたら、この上ない満足感、達成感に浸れるだろうな、うらやましいな、と。

まだまだうまく吹けない現状です。月二回のレッスン後、帰りの車の中で「もっと練習せなあかん、がんばらな！」と自分に言い聞かせる繰り返しです。

今、初級教室は小学生から老人クラブまで六人のメンバーで課題曲に向け取り組んでいます。私も楽しい仲間の皆さんの刺激を糧に一歩上を目指し励んでいます。篠笛教室に入りいろんな人との繋がりが出来、世界が広がった事も有り難く思っています。カラオケ、ゴルフ、と併せて三つの私の宝物です。遅々たる歩みですが、出来る限り続けたいと、楽しくがんばります。

篠笛教室に　感謝！

# 絵を描く　今　思うこと

ターンアートクラブ
志水和司

絵を描き始めて四十年あまり、何の基礎知識もなく師と呼べる人もないところからの始まりだった。近くの書店で買った三冊の「絵の描き方」の本が絵の知識のすべてで、そこから溶き油の種類やキャンパスの張り方、筆の手入れ、描き方を習った。

年月が過ぎ我流ながらも怖いもの知らずで公募団体にも所属させて頂いた。最初が現代美術家集団その次が新制作協会に所属（といってもこのときはただ小磯良平さんに会いたかっただけだけど）、そして現在は白日会に所属させて頂いている。

人見知りな私だが徐々に絵の仲間も出来、話をしているうちに自分の無知さを感じることになった。風景や人物の中の明度や彩度の扱い、色相の扱い方、人物の骨格や筋肉、プロポーションの基礎、構図、光と影や空気遠近法の扱い等々、これまで知識としては知っていても実際にやってみたり、手をとって教わるとなるほどと気付かされる。

ある時は親しくなった先輩（といっても年齢は変わらないけれど）に白と茶色と青色だけで描いてみたらと言われ挑戦してみた。結果は散々だったが、明度、彩度のことが少し分かった気がした。

今は分からないことがあると人に尋ねるようにしている。だいたいは自分より年下で恥ずかしいが尋ねる。相手ももったいぶらず丁寧に納得するまで教えてくれる。

自分の浅はかな納得は、人から見ればどんなにか稚拙なことか。無知な中での選択と知識を持った中での選択はどんなに違うことだろう。

六〇歳にして自分を振り返り、なんとのろまな人生だったかと笑ってしまう毎日だが、今それが分かっただけいいかとも思っている。自分で歩んできた道、歩んで行く道くらいは信じて生きていきたいと思っている。

のろまかもしれないし、ゆっくりかもしれないけれど、まだ知らない世界を知り自分なりに理解し納得し途中経過で未熟であっても作品をつくれたらと思っている。

まだまだ、納得するには先の話になるようだけれど……。

# 三十周年を迎えて

平成会
大牧宏一

今年、平成会は発足三十周年を迎えます。

立ち上げ時は、ほとんどのメンバーが三十代という、若々しくてバイタリティーに溢れた集団であったと推察いたします。と言いますのも、私が入会させていただいたのは十年前の二十周年目の年でありました。この十年は、本当にあっという間に過ぎてしまいました。

私自身、一昨年還暦をむかえましたが、この会の会員平均年齢は六十歳を越えました。私が入会した当時は、体を使ったボランティア活動も活発に行われていましたが、平均年齢の上昇に伴い、その数は残念ながら減少傾向にあります。

私は昨年、会長（年齢順で決まります）をお受けし、〝伝承〟というスローガンを掲げさせていただきました。当地区の名だたる方々の集まりである平成会のメンバーが、次世代に向けそれぞれ引き継がれてきた技術、知識、また経験され、積み重ねられ、創られてきた独自の世界観を、世代間を問わず、一人でも多くの人に発信していただきたいとの思いで、誠に僭越ながら掲げさせていただいたものです。それと言いますのも、この十年間で、三人のメンバーとの本当に辛い別れを経験いたしました。

入会したばかりの頃、宴会で隣席になり、気さくに話をしてくださり緊張を解きほぐしてくださった故志水吉博氏、町内自治会長の寄合で、いつも隣の席でニコニコ話しかけて頂いた故石野哲男氏、最後の最後まで平成会の行事を気にかけてくださった故中村勤氏。この間まで一緒に活動をしていた人たちが、突然逝ってしまわれました。皆さん、素晴らしい人生を歩んでこられた方々であり、それぞれの生き方は誰もマネの出来ない、羨ましくも感じられるものでありました。私を含め多くの人が、もっと話を聞きたかった、もっと手ほどきを受けたかったと今でも悔やまれており、本当に残念で仕方がない、勿体ない事をしてしまったと嘆かれています。この苦い経験を繰り返してはならない、という思いがこの〝伝承〟には込められておりました。

その結果、昨年は三名のメンバーが講師となり、また演奏者となり、ご自身を発信してくださいました。過去の貴重な体験談、角度を変えた史実の捉え方、どのくらい打ち込まれたのか本当に感激させていただいたハーモニカ演奏。少しだけですが、その人となりを知ることが出来ました。今後も是非、平成会という場に拘らず、色々な場で自身を発信して頂きたいと心より願っております。

昔の様に体を使った活動は、段々と難しくなってきていますが、「知恵を絞り、筆を執り、声を絞り、舵を取る」歳をとったからこそ出来る活動が見えてくるに違いありません。時間は有るようで無いです。

少し焦りながら、でも楽しみながら、平成会の一員としてこれからもご一緒に活動を続けさせていただきたいと思っております。

# この頃思うこと

昭和会　山下直昭

今年二〇一八年は、明治元年（一八六八）から一五〇年に当たり、太平洋戦争終結から七三年に当たる。先の戦争終結から七三年というのは区切りが良い年というわけではないが、ほぼ明治維新から現在までの中間の時期に当たるといえる。

この二つの歴史的転換点について言及するのは、この二つの歴史的事件が、日本の近現代史にとって極めて重要な転換点であり、まかり間違えば、日本そのものが無くなっていたかもしれない大事件であったからであり、あえて小生の今年の研究課題としたためである。

太平洋戦争は完全な日本の敗北に終わった。この時期の様相を記憶しておられる方々は多いと思うが、戦争終結にいたる道筋は極めて困難で、国自体が存亡の危機に直面していた。映画「日本の一番長い日」に描かれているとおり、正に日本国は滅亡の危機にあった。あの時、まかり間違えば、現在の韓国と北朝鮮と同様、又以前の東西ドイツ・南北ベトナムと同じく国自体が分断支配され、アメリカ・ソ連の支配下に置かれる可能性があった。それを免れえたのは、多くの幸運と先人の努力、当時の世界情勢によるものであったといえる。

戦後七〇年を経た現在、ようやくあの戦争の歴史的意義、世界史的観点からの見直しが始められている。歴史というものは一〇年・二〇年のサイクルで見られるべきものでもない。その意味で二〇〇年乃至は五〇〇年を見る視点が必要である。既に昭和四十五年に「大東亜戦争肯定論」（林房雄著）が出版されている。この書を全面的に肯定するものではないが、同時に、戦後流布された戦前の日本の日清・日露戦争以後太平洋戦争までの日本の政治の足跡すべてを否定することは誤りであろう。

今年は、大河ドラマで「西郷隆盛」が演じられている。明治維新は、日本の偉業であった。既に当時、東アジアの殆どは西欧列強の植民地となっていたのであり、列強は虎視眈々と日本を狙っていた。タイと日本のみが植民地化を免れていたとはいえ、ペリー来航（一八五三年）後、日本は不平等条約を締結し、その後五七年に亘って条約撤廃に苦労することとなった。アメリカの黒船来航後、日本とアメリカは太平洋戦争終結までは一〇〇年戦争だったと解する見方もある。

現在の世界の様相は多事多端である。カントの「世界永久平和」は当分実現しそうにない。これまでの先人の歩みを振り返り、今ある日本の現状を正しく理解することが私の今年の課題である。

# 五十周年記念コンサートを前にして

山崎町民合唱　片山吉恵

今から五十年前の八月、山崎町民合唱団が結成されました。

その時から、私は主人と二人で参加し、私達夫婦のコーラス人生がスタートしました。ともに歌える幸せや混声合唱の楽しさを感じながら、美しいハーモニーを求めて練習を重ね、「秋の音楽祭」、「西播磨音楽祭」さらには、ダークダックスとともに、「第一回しそうの森の音楽祭」（現在第二十四回）等に出演してきました。

一時は男声合唱（YOB）として分かれた時期がありました。その後、会員の高齢化に伴い、夜の練習が敬遠されるなど、会員不足となり、今は、元の混声合唱に戻っています。

数年前からは、若いメンバーの入会で平均年齢が少し下がり喜んでいます。現在は、栗山祐子先生の指導、長井美江先生の伴奏のもとで施設訪問などにも参加しています。

あれから五十年、この歴史を知るものは私一人となりました。ともに歩んできた主人の聴力が衰え、二年前から同じステージに立てなくなったことが残念でなりません。

しかし、いよいよ今年六月二日（土）の記念コンサートに向けての準備が始まりました。若いメンバーの皆さんに支えていただきながら今日を迎えることができました。

町民合唱団を支え、お世話になった多くの皆々様に感謝、お礼申し上げます。

# 山崎・加生・いさわ冠句会

中瀬　公三

新聞紙　地方版から目を通す　西川　少升
新聞紙　読むのはいつも待ち時間　飯塚　正浩
新聞紙　畳を上げて懐かしむ　小林　茂樹
新聞紙　コトンと音して朝が来る　小林由佳子
新聞紙　龍馬が行くもここからだ　嶋津　千里
新聞紙　何は無くとも目を通す　高井　玲依
新聞紙　良きも悪しきも知る活字　成影　廣子
新聞紙　兜を折って遊んだ日　三木ひづる
新聞紙　脳に刺激と文字を読む　山口　定子
新聞紙　まずは西播活字読む　坂本　忠彦
誕生日　まだかまだかと指折る子　大谷　志路
誕生日　息子を祝う文化の日　東　多鶴子
誕生日　泣いて笑って感謝して　内海喜代子
誕生日　今尚うれしプレゼント　実友　勉
誕生日　孫の便りに元気出す　為国真佐行
誕生日　そっと手を見る半世紀　谷笹　まや
誕生日　今年は孫へ何送る　中瀬　公三
誕生日　餅を背負ってべそで這い　中務　淑子
誕生日　年輪刻み共白髪　宇田　幸夫

**冠句とは**俳句の松尾芭蕉と同じ元禄年間、京都五条下がるの上徳寺に、句碑と墓所のある堀内雲鼓によって始められたものです。

**冠題として**上五文字は出題者が決め、そのあと中七、下五の十二文字を付けて完成させます。山崎・一宮で、明治から昭和の初め頃、盛んに行われていたようです。伊和神社の故安黒義郎先生より、古い地元新聞をいただいて知りました。その頃、安志の知人に冠句会を勧められ、顔を出したのがきっかけで、今では会員が二十名近くになり、加生公民館と学遊館で楽しく月例会をしています。最近は神戸新聞の文芸欄にも載せてもらっています。皆様の参加とご協力をよろしくお願いいたします。

# 川柳破丸会

清水　省三

句会も二二四回を終え、月一回集まり楽しく句会を行っております。

ししん本店、総合病院ロビー、中国高速道待合室にも展示しております。

参加希望の方がありましたら、いつでも歓迎します。

一番の　苦労一番　俺が知る
意地張り　見栄張り突っ張り三拍子
女房が　川柳入選　ネタは俺　生田　大思案
店仕舞　つられてあれもこれも買い
長生きはもういいと言いサプリ飲む
お礼など　口で言いつゝ手が出てる　織金　和敬
若い日の　苦労話も　美談気味
新住宅　庭で焼いてる　秋サンマ
朝の音　トントンが消えチンが増え　是兼　芽吹
すぐ飽きた　健康器具がもの干しに
言訳も　聞き飽きる程　妻に言い
色白の　秋田美人に　ひとめぼれ　高橋　忘剣家
飽きもせず　空気読み読み　金婚式
夫婦喧嘩　俺は土俵に　上がらない
高齢者　割引嬉し　また悲し　谷口　柳幸
ファッションは楽さで選ぶ歳となり
お互いに　飽きても我慢　墓へまで
すぐ飽きる　色々試す　ダイエット　谷口　遊愉
安売りで　買いに行ったに高くつき
茜雲　共に見た人　星になり
腹一杯　食べて飲んでる　痩せ薬　田中　万来
一人旅　ナビが無くても行くあの世
無駄話　老々介護の　知恵見付け
半化粧で　出迎うはめに　早朝の客　千本　風筅
ヤット今　母の小言が　理解でき
ダイエット　新米時期は　一休み
こんにちは　笑顔で挨拶　君の名は　中居　絵師
跡継ぎと　決めてた長男　嫁の里
名前出ず　話中断　話題変え
断捨離を　しては新しい　物を買い　坂東　笑雅
数人に「お前が一番」と言っている
よくキレる　研ぎ包丁と　僕の妻
手を振られ　笑顔返すも　後の人　船元　哲心
八十年　食べても飽きない　米の飯
女一人　男むらがる　七福神
食の秋　春買った服が　着られない　清水　三省

# ともしびの賞　受賞

## 浅田耕三さん

浅田耕三さんは昭和五十年頃から教職の傍ら、歴史小説の執筆活動に取り組み、昭和五十三年に『叛心』を出版するなど、これまでに多くの著書を出されました。

浅田さんは本会機関誌「やまさき文化」の編集委員として創刊号から現在までずっと編集に携わり、特に今回で二〇本目の巻頭随筆を執筆するなど、数多く寄稿されてきました。また、町立図書館時代の平成三年から「古典を読む会」の講師を続けられ、一方では旧波賀町教育委員会が発行した『掘り起こそうわが町わがふるさと』の推敲と指導を続けてこられました。

これら地域文化の振興に貢献された功績が認められ、兵庫県から今年度の「ともしびの賞」が授与されました。

この「ともしびの賞」は、兵庫県が地域社会で長年にわたりひたむきな努力を続け、地域の文化の向上に貢献して、その活動と功績が著しい個人又は団体を表彰する賞で、浅田さんの今までの功績を讃えて表彰されたことを嬉しく、有難く思いここに紹介いたします。

# 第三十九回春の芸能祭ご案内

**日　時**　平成三十年五月二十日（日）　午前十時から

**場　所**　山崎文化会館　大ホール

**主　催**　春の芸能祭実行委員会・（公財）宍粟市文化振興財団

**後　援**　宍粟市・宍粟市教育委員会・宍粟市文化協会・宍粟市山崎文化協会

山崎文化協会の参加団体が中心となって、会員の皆様の日頃の練習の成果を発表いたします。一宮・波賀・千種からも賛助出演していただく予定をしています。

多くの皆様のご鑑賞とご声援をいただきますようよろしくお願いいたします。

今年度の出演予定団体をご紹介します。

□邦　楽　山崎竹壮会・司友会・光陽会・琴泉菖蒲会・絵夢の会・藤の会・姫路正絃社波賀教室

□邦　舞　郁踊会・むらさき会・千代の会・美藤会

□民　踊　さつき民踊グループ

□詩舞道　賀道流最上吟詠会・紫洲流日本明吟会・吟道摂楠流宍粟吟詠会・冠翔流扇翔会

□民　謡　山崎民謡連合会・波賀民謡会

□日本舞踊　山崎日本舞踊の会

## 宍粟市山崎文化協会 役員及び団体名

会　長　福岡　久藏
副会長　伊野　操治
　　清水　省三
　　宗平　圭司
　　前野　良造
理　事　田中　健三　山崎郷土研究会
　　下村　悦子　山崎文学会
　　鎌田　裕明　新潮会
　　森本萬千子　山崎歌人協会
　　竹添　和彦　山崎囲碁同好会
　　小倉　庸永　宍粟茶華道協会
　　三谷　恭三　山崎謡曲同好会
　　前野　洋一　山崎町郷土芸能保存会
　　山下　直昭　昭和会
　　前田　香織　宍粟市少年少女合唱団
　　鳥羽チエノ　山崎俳句協会
　　西川　慶子　さつき民踊グループ
　　福岡　久藏　山崎美術協会
　　石野　和雄　山崎邦楽の会
　　中谷　多江　宍粟日本舞踊の会
　　川原　勝典　山崎詩舞道連盟
　　中野　剛志　山崎町民合唱
　　藤永　幸正　宍粟和太鼓アーツ倶楽部
　　坂根　雅彦　平成会
　　石田　陽子　山崎民謡連合会
　　清水　省三　川柳破丸会
　　志水　和司　ターンアートクラブ
　　宇田　幸夫　山崎いさわ冠句会
　　前田　幸子　山崎かるた同好会
監　事　前野　洋一
　　菅原　淳
事務局長　大谷　司郎
事務局次長　谷林　哲哉
会　計　小西　美穂
（敬称略・順不同）

### 「やまさき文化」編集委員

編集長　清水　省三
委　員　浅田　耕三　荒木　俊介
　　鎌田　裕明　前野　良造
　　鳥羽チエノ　森本萬千子
　　下村　悦子　小西　美穂

### 事務局だより

## 黒田熊之助ゆかりの地

### ＝弁天池の畔に石碑建つ＝

昨年十一月山崎幼稚園の北側にある弁天池の堤の脇に「黒田熊之助ゆかりの地」の石碑が宍粟市商工会十周年記念事業の一つとして建立されました。

熊之助は、戦国武将黒田官兵衛孝高の次男で、福岡藩が編纂した『黒田家譜』によれば、孝高が天正八年（一五八〇）山崎城主となり、その二年後の同十年に「次男熊之助生る」とあり、また、黒田家の菩提寺崇福寺の熊之助碑には「播磨の山崎城に生る」と刻まれています。さらに、熊之助の最期について、慶長二年（一五九七）の慶長の役の時、父と兄（長政）を追って朝鮮へ渡海する途中、玄界灘で溺死したと伝わっています。

孝高は天正十五年（一五八七）豊前国中津へ移り、山崎の統治はわずかの期間でしたが、戦国の歴史の舞台に登場した父を持つ熊之助、謎は多いながら黒田氏と山崎の地をつなぐ縁を後に語り継ごうと記念碑が建てられました。

この山崎城は、篠ノ丸城と考えられていて、その麓に居館があったものと想定すると、山崎八幡神社から元山崎付近が黒田氏の居館跡として考えられ、もみじ祭りで多くの人が見える弁天池付近を適地として石碑が設置されました。

事務局長　**大谷　司郎**

## 編集後記

本号の冒頭で福岡会長が、自身の体験から戦争の悲惨さと、戦後七十年経った今の若い人たちに託す希望を書かれました。また、一昨年の荒木俊介さんに続き、浅田耕三さんが県の「ともしびの賞」を受賞され、当会としてもたいへん名誉なことであります。

特別寄稿では、前神戸文学館館長の中野景介氏に日本の川柳の第一人者時実新子さんにまつわる興味深いエピソードを書いていただきました。

そして、各分野の会員さんから活動の報告など多彩で充実した文化誌になりました。

宍粟市も人口減少が続き、殊に若者の流出が多く、元気盛りの年代が少なくなっています。若い人たちも参加できる協会にするための工夫努力が必要と痛感しております。

いつもながら広告掲載をいただく事業者様には、当会活動へのご理解ご協力に感謝いたします。

最期に、本年秋には山崎八幡神社の「薪能」が行われます。西播磨でも稀なる優れた行事ですので、多くの方に鑑賞していただきたく思います。

編集長　**清水　省三**

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店・レンタカー

# カメウチ電装株式会社

本社・工場　兵庫県宍粟市山崎町今宿 98－15
ＴＥＬ（0790）62－1607㈹
太子営業所・姫路営業所・たつの営業所・福崎店

# ふじむら貸衣裳

人生の節目を飾る大切な一着を貴方に

結婚式はもちろん成人式・卒業式・七五三
また留袖や訪問着・喪服のご衣裳など
豊富な品揃えでお客様をお待ちしています。

兵庫県宍粟市山崎町山崎１８１　Tel:0790-62-0052　http://www.fujimura-kashiishou.com

## 贈り物に…「しそう杉ボールペン&シャープペン」

三菱鉛筆「故郷（ふるさと）の木持ち」シリーズは、地球温暖化と地域材振興策に「少しでも役に立つ商品」をコンセプトに作られた筆記具です。全国の都道府県産のスギ、ヒノキ、ヒバ、マツ等に高度な木材の加工技術を施したもので、適度な重さが高級感を醸し出しています。兵庫県では「しそう杉」が選ばれています。「しそう杉」のほのかな香りをお楽しみ下さい。

# トクサヤ文具

山崎町山崎 180-1 TEL62-0067

¥1,800＋税
さらにレーザー彫刻（オプション）であなただけの１本に…
参加賞、記念品に…しーたんステーショナリー各種あります!

# ほっと、ひといき 伊沢の里

○お祝いの会食　　○法要後の会食
その他各種宴会承ります
リラクゼーションルーム　好評稼働中
〒671-2517　宍粟市山崎町生谷214番地１　TEL0790（63）1380

# コーエーカメラ Specialty Camera Shop

■本　店/〒671-2576
宍粟市山崎町鹿沢26-3
TEL(0790)62-2089　FAX(0790)62-7429
E-mail info@ko-e-1972.com

■咲ランド店/〒671-2545
宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F
TEL・FAX(0790)63-0533
E-mail saki@ko-e-1972.com

地域で最も信用・信頼される
金融機関をめざして

●豊かな街づくりをお手伝いする●

森の妖精/ネーチャ

# 西兵庫信用金庫

http://www.shinkin.co.jp/nisisin/
TEL 0790−62−2020

森の妖精/サッキー

---

## 貴邸の電力を自給自足!

発電→売電
太陽光発電
Panasonic

×

発電+給湯
エネファーム
ENEOS

スマート&エコな
「光熱費=ゼロ」リフォーム

---

= お車と住まいの快適、なんなりと =

# ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)
本社 宍粟市山崎町中井96

石油・タイヤ・洗車・オイル
バッテリー・車両整備・保険
☎0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般
住宅リフォーム・太陽光発電
☎0790-63-1234

---

創業明治28年・さつき本舗

# 御菓子司 あらき

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

山田店：播州山崎町山田 (電)0790−62−0160
福崎店：福崎町西田原1177 (電)0790−22−7555

---

ギフト・記念品に名入れ刻印で
オリジナル筆記具はいかがですか

名入れ料金１本３５０円

# イトーオフィスサービス(株)

山崎町中広瀬１１７−１２　宍粟市役所南向い

---

# 西兵庫トランスポート株式会社

NAGATA
NAGATA GROUP

本　　社　兵庫県宍粟市山崎町御名335-1
〒671-2554　TEL0790-63-2007
FAX0790-63-2007